

60

64

赤痢新治療法

完

059322-000-7

60-64

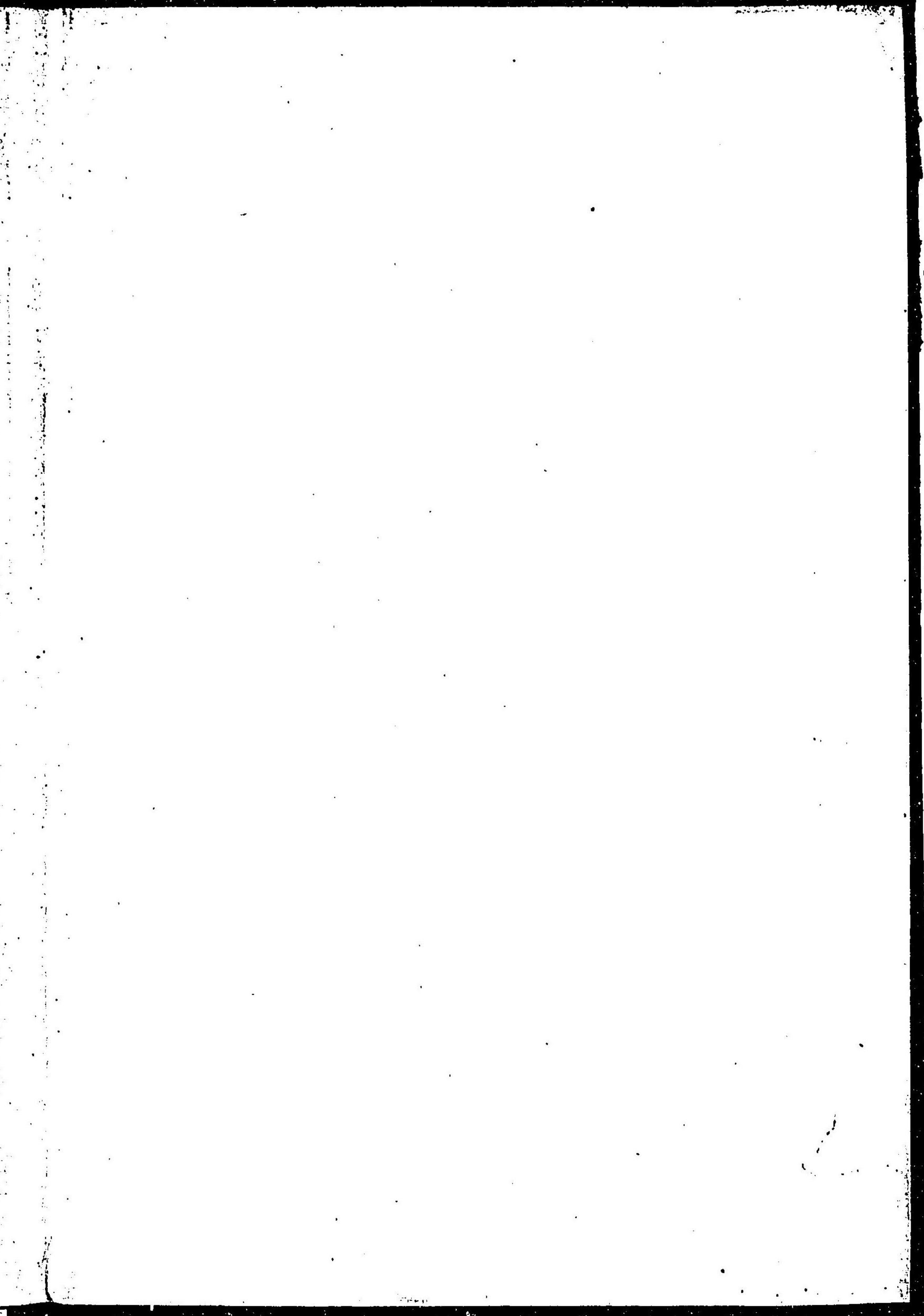
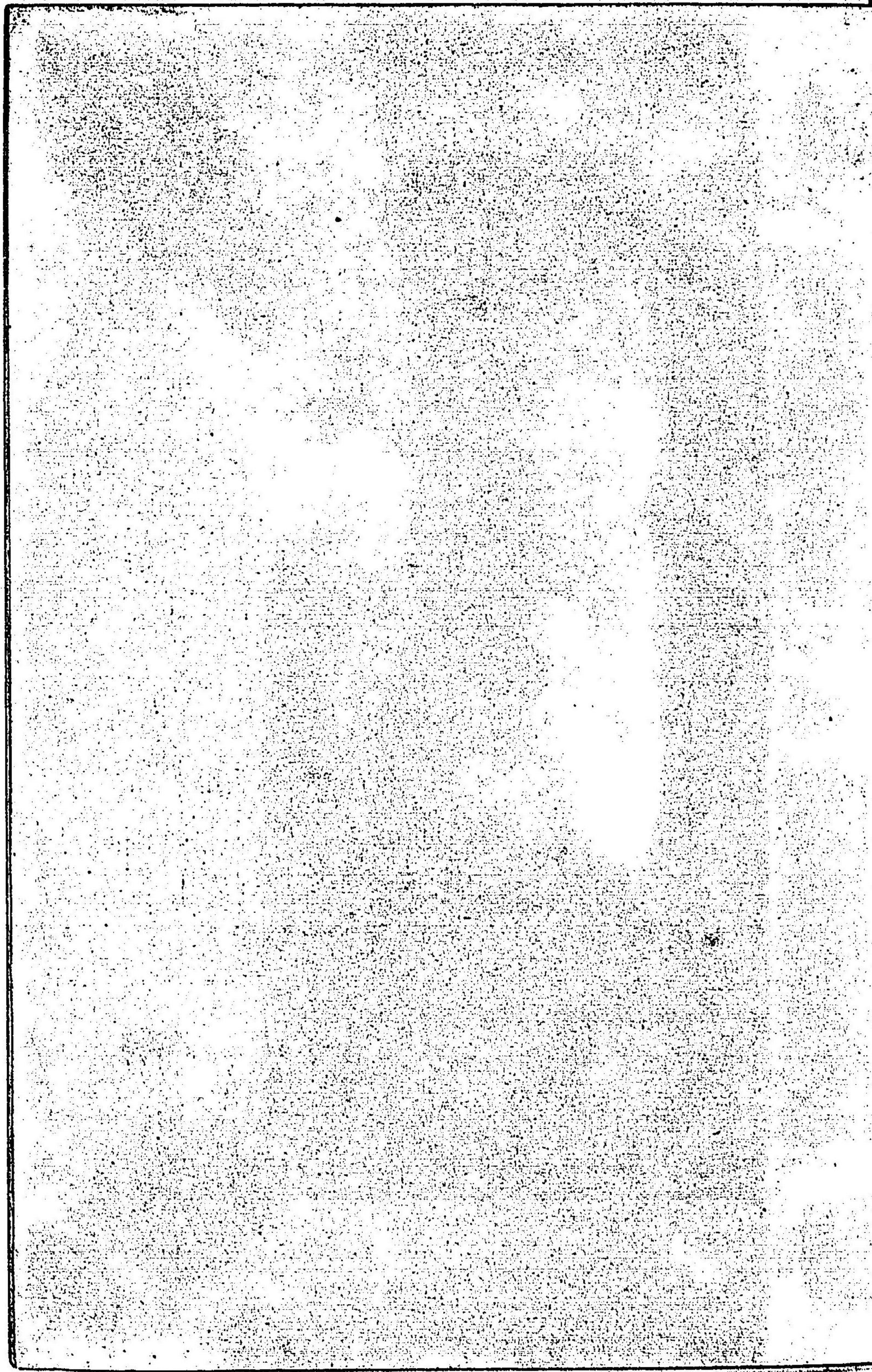
赤痢新治療法

小林 広/述

M31

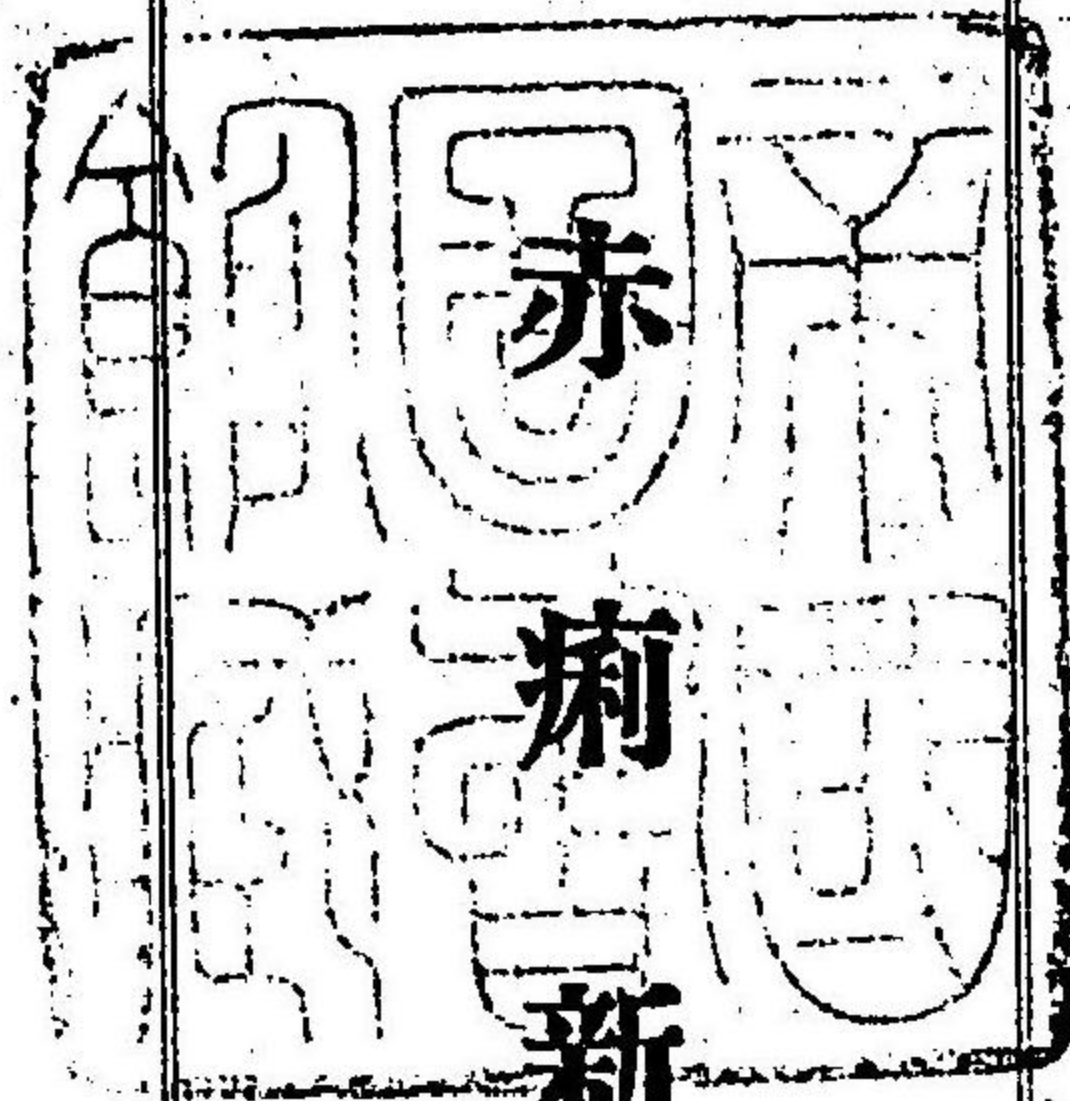
CBF-0182





60-64

醫學士小林廣講述
山縣直藏筆記



赤痢新治療法 完



明治三十一年九月刊行

東溟堂藏版

赤痢新治療法

緒言

吾師小林學士ノ赤痢頓挫療法ニ關スル講演ハ當該各地ニ於テ筆記セラレタレド
勿卒ノ際多少ノ錯誤ナキヲ保セス依テ予ハ二三ノ速記ニ就テ交互参照シ以テ師
ノ講演原稿ヲ補ヒ此一編ヲ成セリ赤痢及佗ノ四病ニ對スル治療ノ方法特效藥ノ
應用及其治驗等ハ佗日學士自カラ著書又ハ新誌ニ由テ世ニ公コセラルヘシト雖
モ今ヤ赤痢流行ノ際師ノ赤痢新治療法ノ講演筆記ヲ得ント希望スルノ醫家少ナ
カラス故ニ先ツ學士ノ一閱ヲ請ヒ此編ヲ刊行シテ其急需ニ應スルコトヲナセリ
依テ一言ヲ卷首ニ冠ス

明治三十一年九月

山縣直藏識

赤痢新治療法概目

緒論	一丁
特效藥發見ノ經歷	四丁
瘧病、結核病、脚氣、腸窒扶斯、赤痢等ノ病性ニ就テ	十丁
瘧病	十三丁
結核病	十三丁
脚氣	十八丁
腸窒扶斯	十四丁
赤痢	二十五丁
獨逸國諸博士ノ赤痢療法	二十九丁
赤痢ヲ頓挫スベキ時期	三十九丁
赤痢特效藥ノ用法	四十三丁
結論	四十八丁

概目終

赤痢新治療法

小引

余ノ赤痢新治療法ハ今ヤ山縣氏ガ余ノ近縣各地ニ試ミタル講演ノ速記録ヲ余ノ講演原稿ヨリ急卒ニ編成セル一小冊子ニ由テ世ト公ニセラル、ニ至レリ、此舉ヤ固ヨリ余ノ素懐ニ副フモノナルヲ以テ速ニ一閱ヲ了シ聊カ所感ヲ述ベテ卷端ニ附セントゾ。

現今ノ實地醫學上最モ重要ナル問題ノ一ハ傳染病ノ治療法ニ在ルコト論ヲ待タス、然ルニ傳染病中人類ヲ被害スルノ勢力最モ猛烈ナル者ニ對スル治療方法ニ今日醫學社會ニ認識セラレタルハ古キハ梅毒及麻刺里亞ノ療法新シキハヤフアリ、^リ血清療法等值々數種ヲ外殆シド算ウルニ足ルベキモノナキナリ、余ヤ一個ノ治療醫ニシテ研究試驗ノ公務ヲ帶ヒス又其時日ニモ乏シク進ンテ此重要問題ヲ解釋スルヲ敢テセスト雖モ多年ノ經驗上二三傳染病ノ病性ヨリ推尋シテ各之ニ特效アル療法及藥物アリト自認シタルモノナキニ非ス、殊ニ近年本邦各地ニ猖

二
概シテ殆ト民生ヲ聊ンセシメサル赤痢ニ對シテハ多數ノ治驗ニ據テ其奏効ノ確實ナルヲ信スル所ノ療法アリ、頃ヨ余ガ赤痢新療法ヲ演述シテ流行各地ノ同業諸家ニ詢リ其試用ヲ獎請セント欲シタル者即チ是レナリ。

初メ余ハ本年四月初旬我東京醫學會ガ第十一回總會ヲ開設スルニ際シテ其演說者ノ募集ニ應ジ余ノ演題ハ五傳染病殊ニ赤痢ノ新治療法ナル旨ヲ報告シ置キシモ該會ハ何故ニヤ之ヲ演題未定ト掲ケ且ツ演說時間ハ未ダ予ノ席次ニ至ラスシテ經過シ去リ爲メニ余ノ該療法ニ關スル所見ヲ發表スルコト能ハザリシハ余ノ最モ遺憾トスル所ナリ、然ルニ爾來數旬赤痢ノ大流行復々現ハレ時事新報紙上昨今兩年患者ノ比較數ヲ擧ケタル者チ一見スルニ及ビ余ハ一日モ速ニ余ノ新療法ノ汎ク實地ニ試用セラレノコトヲ熱望スルノ餘今回卒然出張講演ノ擧コ出テシルモノナリ、本病流行前ニ公發セントシタル機會ハ不幸コシテ逸シ去レリ今ヤ稍、時期ニ後レタルモ仍ホ同業諸氏ニシテ此冊子チ一讀セラレタランニハ先ツ余ガ赤痢新療法ノ旨意ヲ認メラレ現在及將來ノ赤痢病者ニ對シ悉ク該治療法ノ實行ヲ試ミラレノコト偏ニ渴望ニ堪ヘサルナリ、而シテ本療法ノ汎ク實地ニ應用セラ

レタル已上之ガ適否ヲ審判スル者ハ彼ノ机上的評論者ニアラスシテ赤痢病者自己ニ現ハル、所ノ結果ナラン、予ノ講演中ニ一言セシ如ク往年余ハ龍腦樟腦ノ錯誤ヲ辨シ種痘官業ノ必要ヲ説キタルモ當時耳ヲ傾クル人少ナクシテ後年遂ニ其實行ヲ見テ得タリキ、本療法ノ如キ目下何等ノ批評アランモ予ノ固トヨリ甘受スル所コシテ只佗日ノ成績如何ヲ注視スヘキノミ、脚氣病以下爾餘各病ノ特效藥及用法ノ如キハ尙ホ多少ノ治驗ヲ經タル後之ヲ發表セントス、山縣氏ノ書發刊將ニ成ントス猥リニ一言ヲ冒スルコト斯ノ如シ

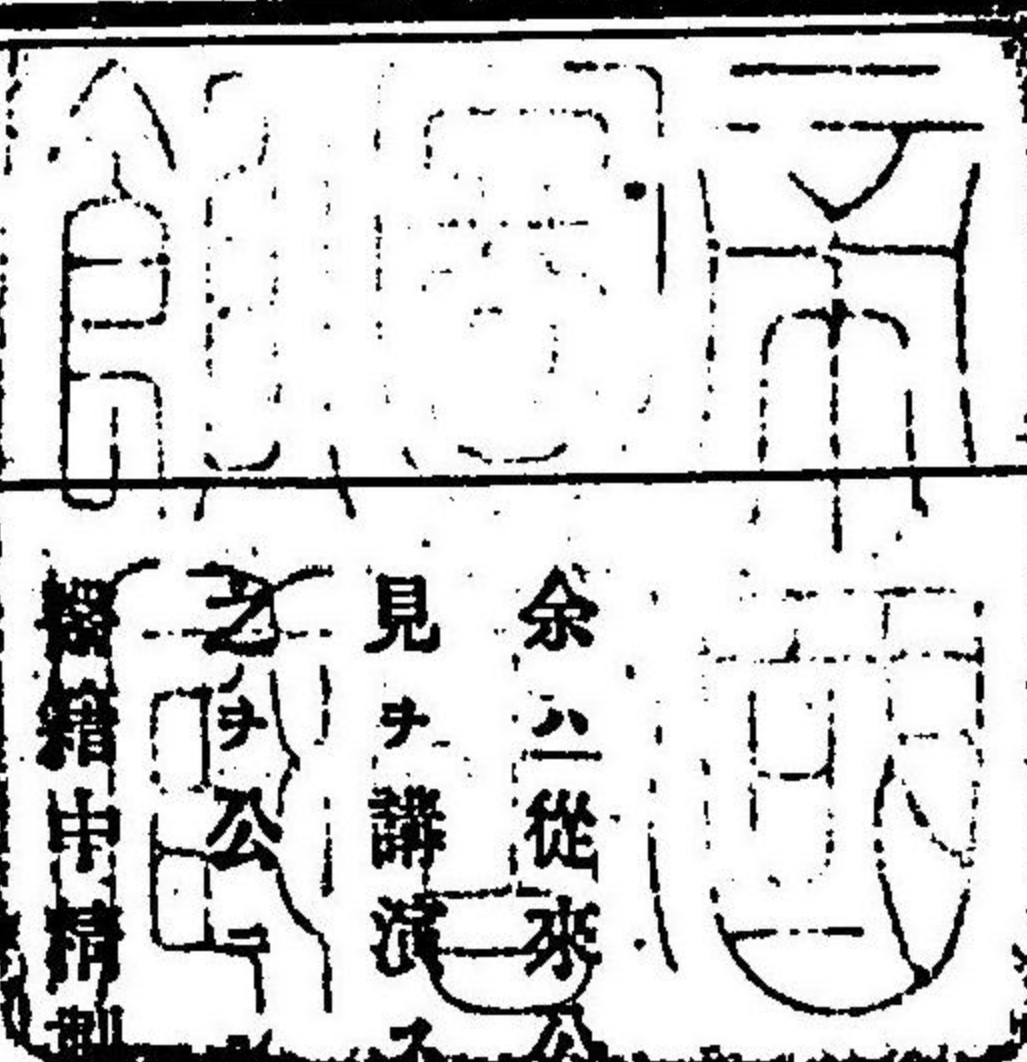
明治三十一年九月

小林 廣識

赤痢新治療法

醫學士 小林 廣 講演

山縣直藏筆記



余ハ從來公私共ニ繁劇ノ職務ニ從事シ研究成績ヲ記述シ又ハ己レノ所見ヲ講演スル等ノ餘閑ニ乏シカリシト雖トモ必要トモ機會トニ逢ヘハ亦之ヲ公ニシテ大方ノ教ヲ請フニ踴躍セサリキ例之ハ明治十五年ニハ我々精製樟腦ヲ龍腦ト汎稱スルノ誤ヲ辯シ十七年ニハ治癩新論ヲ著シテ本邦ニ於ケル癩病ヲ消滅セシムヘキヲ論シ二十三年ニハ本邦常用ノ聽診器ハ學校ニ於ケル實地演習ニ不適ナレハ必ス管狀聽診器ヲ用ニヘキヲ勸告シ二十四年ニハ牛痘苗ノ製造配賦ヲ民業ニ委ヌ可カラサルヲ論シ同年更ニ肺癆豫防論ヲ著ハシテ該病ノ本性及療法ノ精神ヲ説明

「ツベルクリン」クレオソール等ノ有効ナラサルコトヲ論シ、其他又醫服ノ使用、檢梅方法ノ弊害及改良等其意見ヲ公發セシコト少ナカラズ亦往々コシテ愚見ノ現今ニ行ハル、ヲ見ル敢テ今回卒然赤痢ノ流行ニ臨ンテ赤痢新療法ヲ揚言セントスルモノニアラサルナリ、又余ガ學校及専門學會ノ已外ニ於テ今回ノ如キ講演ヲ試ムルハ實ニ三回ニシテ聊カ之ニ就テ感スル所ナキニアラス即チ其第一回ハ明治十六年郷里足利ノ爲メ衛生上ノ事ヲ演述セシモノナルガ其際ハ殆ント百名ノ人ヲ招請シ、聽席ヲ設ケ其席場ニテ演說ヲ試ミタルニ現今ノ足利町内ニ二條ノ流水ヲ見ルハ即チ其結果ノ一コシテ爲メニ有名ノ機業地タル足利ヲシテ今日衛生上其他ノ公益ヲ得セシメタルハ隣邑タル當地ノ諸君中或ハ之ヲ聞知セラル、人モアランカ而シテ第二回ハ明治二十四年神戸市ニ於テ余自ラ進ンテ會場ヲ設ケ三日間ニ亘リ肺勞豫防ノ事ヲ演述シ同病蔓延ノ虞アル神戸市ノ市人一般ニ警告スル所アラントセシモノナリキ、前二回ノ講演ニ於テハ世間ノ狀態仍ホ斯クノ如ク講演者自ツカラ手數ヲ悉クシ

テ聽者ヲ求メタリシニ今日第三回ノ講演ニ於テハ各地方ノ醫士團體ヨリ余ニ一場ノ演述ヲ希望セラル、ニ至リタルハ亦世ノ進運ヲ證スルモノニシテ余ノ衷心ニ於テ大ニ満足スル所ナリ、殊ニ今回余ガ其療法ヲ演述セントスル赤痢ハ頻年流行ノ及フ所殆ント全國ニ涉リ、其利害ノ關係夫ノ足利、神戸、一町一市ノ狭小ナルガ如キニ非ザルノミナラズ聽者ハ主トシテ醫業ノ諸君ナルコト余ノ最モ欣フ所ナリ、而シテ今ヤ赤痢ノ流行漸シ東京及其近縣ニ襲ヒ來ラントスルカ故ニ一日モ速ニ余ノ發見セル頓挫療法ヲ諸君ニ報道シ且ツ此療法ノ實行上成ルベク誤解ナカラシコトヲ希望シ、仍ホ此席上ニテ諸君ノ質問ニモ應ジニハ余ノ赤痢療法ガ果シテ頓挫療法タルノ効績アルヤ否ヤ、又其藥品ハ赤痢ノ特效藥タル價値アルヤ否ヤヲ諸君爾後ノ經驗ニ徵シテ確定セラレシコトヲ懇請スルモノナリ。

茲ニ余ガ赤痢ノ療法ニ關シテ講演スルニ先ダテ先ツ佗ノ四傳染病ノ療法ニ就テ一言セントスルハ聊カ其理由アルコトナリ、諸君姑ク忍耐

ヲ賜へ。

余ハ初メ結核病ニ就テ其病性ヲ研究シ其治療方法ニ於テモ一般慣用ノ結核治療法及結核治療藥中毫モ信ヲ措クベキモノナキヲ概シ久シク同病ノ患者ヲ治療セシ結果遂ニ結核病ニ對シ最モ適當ト信スル療法ヲ認メ次テ赤痢並ニ脚氣及腸窒扶斯ニモ略同一ノ立脚點ヨリ各其特效藥ト信スルモノヲ發見セシ順序ナルニ由リ赤痢ニ關スル特效藥及治療方法ヲ世ニ公ニスルニ因ミ余ガ今日此發見ヲ得タル經歷ヲ略述シ置ントスルモノナリ而シテ做シ得ヘクソバ他日更ニ虎列拉再歸熱格魯布性肺炎等諸種ノ傳染病ニ對スル治療方法若クハ其特效藥ヲモ發見シ現今細菌病學者ガ完成シツアル傳染病治療法ニ對峙スルニ藥物的療法ヲ以テスヘキ所以ヲモ一言シ傳染病ノ治療ヲ細菌學ノミニ委却シテ傍觀シ去ルガ如キハ斷シテ治療家タルノ責任ヲ盡シモノニ非ザルコトヲモ勸告セント欲スルモノナリ。

願フニ近世ノ醫學ハ非常ノ速力ヲ以テ進歩シ學理的發明ハ相踵テ出テ

實地的技術ハ日一日ヨリ精シク其造詣那邊ニ達スベキヤ固ヨリ測リ知ル可カラズ就中近世ニ至リ萬有ノ一新野ヲ開拓シテ發達シ來リタル彼ノ細菌學科中殊ニ我細菌病學ハ絶大ノ勢力ヲ以テ勇進シ二三斬新ナル細菌學的治療法ノ世ニ出ツルヤ世人ハ即チ以爲ラク凡ソ下等有機物ニ因由セル諸多傳染病ノ確實ナル治療法ハ將來必ス細菌病學ノ學理上ヨリ誘導セラレ其結果今日傳染病ノ藥物的治療法ハ一モ二モナク全然自滅ノ地位ニ陥ルナラント特トリ普通新聞ナル某新報ノ記者ノミナラス我學界ノ某雜誌ノ如キモ亦彼ノ「ヤフテリア」血清療法ノ世ニ現ハレシ際從來傳染病ニ對スル藥物的療法ヲ無二無三ニ誹詆シ去リ殆ソト見聞ニ堪ヘサルノ狀況ヲ呈シタリキ蓋シ新ヲ喜ヒ異ヲ迎フルノ一方ヨリ之ヲ視ルニ於テ實ニ斯ノ如クナラサルヲ得ナリナラン。

余輩惟フニ彼ノ細菌病學ナルモノハ實ニ我醫學ノ廣野中暗黒ナリシ地ヲトノ新タニ開拓シ來リ全然其學理上ヨリ構成セル細菌病ノ治療方法ヲ發見シ從來空シク學者ノ頭腦ヲ疾マシメシモ遂ニ適切ノ治法ヲ得サ

リシテア破傷風等ノ血清療法相違ヲ出テ出藍ノ令譽層一層ヨリ
高ク遂ニ世人ヲシテ傳染性諸病ノ治療ハ悉ク此細菌病學者ノ手ニ成リ
藥物の治療家ノ如キハ茫然手ヲ拱シテ傍觀スルニ過キサルヘシト臆想
スルニ至ラザルモ事實上亦自然ノ勢ナルノミ然ルニ今日余輩ヲ以
テ之ヲ觀レバ藥物の治療方法ト雖モ近時世人ノ想像ノ如ク下等有
機物ニ起因スル諸病ニ對シテ全ク無能力ニシテ已ムガ如キコト斷シテ
之レ無カルベキナリ況シヤ傳染病ニ對スル最モ簡單ニシテ最モ確實ナ
ル藥物の治療方法ノ發明已ニ久シク世ニ存スルニ於テオヤ。
故ニ余ハ先ツ左ノ問題ヲ設ケテ此疑問ノ了解ヲ試ミントス。
凡ソ生體外若クハ生體內ニ在リシ諸種ノ有機物が吾人人體内ニ竄入シ
來テ生起スル各種ノ疾病即チ傳染病若クハ寄生蟲病ニ於テ其確タル特
効ヲ奏スヘキ治療方法ノ有無ヲ問フニ吾人ハ如何ナル答辭ヲ與ヘ得ヘ
キヤ？今日公平ナル治療家ハ現時ノ實際上左ノ如ク答フルヲ得ヘケン
第一 新メニ細菌病學ヨリ誘導セラレテ有望的ノ特效ヲ奏シ得ヘ

キ治療方法アリ。

第二 從來ノ藥物的治療ニ於テモ均シク亦有望的ノ特效ヲ奏シ得
ヘキ治療方法アリ。

第一問ニ關シテハ現今細菌病學上ヨリ成レル傳染病ノ治療法中其特效
ヲ奏シ得ルモノハバストール氏ノ狂犬病療法、次ニ「ヤフタリヤ」破傷風、脾脫
疽等ニ對スル血清療法ノ數種アリ而シテ夫ノ百餘年前英醫センナーノ
發明ニ係ル種痘法ノ若キモ亦之ニ算入スヘク殊ニ其開祖トモ云フヘキ
モノナリ然レトモ此第一問ハ近時却テ諸君ノ熟知セラル、所ナルノミ
ナラズ余ノ演述セントスル本題ニ非ザルヲ以テ單ニ茲ニ一言スルニ止
ムヘシ。

夫レ斯ノ如ク細菌病學ヨリ出ヅル所ノ治療法ハ實ニ其學理上ヨリ推究シ
來リ藏レタルヨリ之ヲ顯ハル、ニ致シ其方法ト結果トノ關聯頗ル完美
ナルモノアリト雖トモ從來ノ藥物的治療法ニ至テハ應用スヘキ藥物ト
應用セラルベキ病患トノ間ニハ始メヨリ關聯アルコトナシ恰モ或ル物

ニ或ル物ヲ合シテ其中和スルヤ否ヤヲ試ムルガ如キ關係ヲ呈スルニ由
リ事態稍迂遠ニ亘ルノ遺憾ヲ免カル、能ハザルナリ但シ將來細菌病學
上ニ探見セル病菌ノ性質ニ應シテ藥物ヲ應用スルノ日アラハ蓋シ亦一
段ノ進歩ヲ加フルヲ得ン。

第二問ニ關スル藥物の治療方法中確實ニ特效ヲ奏シ得ルモノハ「ア
ル」(鷓口瘡)ニ於ケル礪砂、我邦「マラリヤ」ニ於ケル規尼涅及砒劑急性關節
麻質斯ニ於ケル撒里矢爾酸、淋疾ニ於ケル一二ノ適藥、蛔蟲ニ於ケル珊篤
專、雜蟲ニ於ケル或ル驅蟲藥、疥癬ニ於ケル百露拔爾撒謨梅毒ニ於ケル汞
劑及沃度劑、急性鼻加答兒ニ於ケル樟腦吸氣法、小林廣成ル種ノ「エリツエ」
ムニ對スル汞劑(全上)等ハ是レ皆其用法及時期ヲ誤ラサレバ殊ニ卓絶ノ
特效ヲ奏シ得ルモノナリ、而シテ外科的消毒方法ニ由リ腐敗ヲ防遏シ能ク
病毒ヲ驅除シ以テ全然殺菌制腐ノ目的ヲ達シ得ルニ至レル所以ノモノ
ハ蓋シ主トシ細菌學進歩ノ成果ニ由ルベシト雖モ其作用ニ至リテハ均
シク藥物的ノ作用ニシテ現時細菌病學者ノ樹立セル最大旗幟タル血清療

法トハ大ニ其旨趣ヲ異ニスルモノト云フヘキナリ。

是ニ由テ之ヲ觀レバ細菌病學ノ精神ハ一ニハ細菌病ノ性質ヲ解明シテ
其科學ノ完成ヲ期シ一ニハ細菌病ニ對スル血清療法ノ如キ療法ヲ考究
スル等ニ存在シ而シテ彼ノ血清療法ノ如キ菌病學上ヨリ導致セル治療
法ハ固トヨリ此菌病學者研究ノ成績ニシテ其專有ノ方法ナリト雖モモ
細菌學者ノ爲メ其本性ヲ明了トナレル所ノ所謂細菌病若クハ少クモ
病原學上ヨリ下等有機物ニ起因スルコトヲ察知スヘキ諸種ノ疾病ニ對
シテハ、我藥物中尙ホ彼ノ「マラリヤ」の中セル規尼涅防腐ノ目的ニ適當
ナル消毒藥等ノ如ク卓絶ノ特效ヲ奏シ得ベキモノアリテ存スルヤ否ヤ、
余ハ之レアリト斷言スルニ躊躇セザルナリ、然レトモ現今斯ノ如キ特效
的藥物ノ發見セラレタル數尙ホ甚ク鮮ナキハ即チ是レ余輩ガ銳意研究
シテ開拓スヘキノ餘地甚ク大ナルヲ示スモノニ非スシテ何ソヤ。

是ニ於テカ余ガ
第一著ニ特效藥發見ニ從事シタルハ癩病

第二ニ從事シタルハ結核病

第三ニハ脚氣

第四ニハ腸窒扶斯

第五ニハ赤痢ナリ。

願フニ癩病及結核病ノ如ク其病性上最モ緩慢ノ經過ヲ取り極メテ悠久ノ持續ヲ有スルモノニ對シテハ設トヒ頓挫的ナラザルモノ一時的方法ニ由リ該病ヲ全治セシムベキ企望ハ到底徒勞ニ屬スベキナリ蓋シ該病ノ病床の性質ヨリ之ヲ推考スルモ斯ノ如キ療法ノ適應ズベキコアラザルコト之ヲ斷言スルニ難カラサレバナリ加之ナラズ余ガ研究上結核病適當ノ療法ト認メタルモノ即チ封鎖的治療法ノ如キヲシテ充分其目的ヲ達セシメンニハ數月乃至一二年ヲモ要スヘキガ如キ畢竟其病性ノ然ラシムル所ナリ。

次ニ梅毒ニ至テハ設トヒ其特效藥タル汞劑若クハ沃度劑ガ已ニ久シク世ニ知ラレタルモ尙ホ且ツ其治療上之ヲ頓挫得ルノ方法ナキ所以

ハ是レ亦其梅毒タル病性ノ然ラシムル所ニ外ナラザルベシ故ニ梅毒ニ對シテハ其特效藥ノ儼存スルニ拘ハラズ仍ホ余ガ所謂封鎖的治療法ニ由ラザレバ其効績ヲ收ムルコト能ハサルベシ茲ニ梅毒ノ封鎖的療法ヲ實行シテ目的ヲ達センニハ初期ノモノニシテ概テ數月間ヲ要スベキヲ以テ之ヲ結核病ノ封鎖療法ニ比スレバ大ニ其時期ノ短少ナルコトヲ發見スベシ是レ亦畢竟各疾病各其本性ヲ異ニスルニ基ツクモノト云ハザルニカラス。

然ルニ脚氣ニ在テハ余ガ認メテ本病ノ特效藥ト爲スモノヲ以テ之ヲ治療スルニ初期ノ患者ニ於テハ設トヒ其症狀ハ殆ト全身ニ亘リ知覺異常ハ四肢及軀幹ニ汎發シ壓痛モ亦頸部以下ニ於テ汎シ強發シ胃部緊閉シ、食思ナク甚タシキハ惡心嘔吐ヲ催シテ絶食スルニ至リ脈搏百至以上ニシテ心跳ヲ訴ヘ呼吸二十五六回ニシテ其不安ヲ感シ殆ト歩行シ難キニ至リシ者ト雖モ僅ニ三四日ノ間ヲ出テズシテ其神經症狀ハ殆ト快治ニ就キ全ク頓挫的ノ効績ヲ見ルヲ明白ナリ然レモ全然其治療ヲ得セシ

メシニハ尙ホ且ツ數日間ノ日子ヲ要セザル可カラズ、是レ脚氣ハ其脚氣
 タル病性ノ然ラシムルモノニ外ナラザルナリ。
 然ルニ格魯布性肺炎、發疹室扶斯、腸室扶斯、再歸熱、赤痢、虎列拉病〔ペスト〕、間
 歇熱、淋疾、ヤフテリア〔丹毒〕、破傷風等ノ諸傳染病及諸多ノ中毒病等ハ在テ
 ハ凡ソ細菌學的ト藥物的ト器械的トニ論ナシ之ニ適セル治療法ハ何レ
 ニセヨ存在スベキモノニシテ其方法タルヤ該諸病ヲシテ僅々ノ時日ヲ
 期シテ全然治癒ニ就カシムルモノナラザル可カラズ、而シテ此諸病ノ本
 性上ヨリ云ヘバ僅々一二日間若クハ數日間ニ之ヲ全治スルモノニアラ
 ザレバ本病ニ對スル真正ノ治療法ト認ム可カラザルヤ敢テ言テ待タザ
 ルベシ。

今一步ヲ進メテ論センニ、腸室扶斯、赤痢等ノ如ク其病性上腸粘膜ニ潰瘍等
 ノ變化ヲ來スベキ諸病タルヤ、該病ガ未ダ全然其潰瘍的變化ヲ形成セザ
 ルトキ若クハ未ダ深ク侵襲セサルトキ、即チ腸室扶斯ニ在リテハ少クモ
 發熱後大約四五日以内ニ、赤痢ニ在リテハ發症後二日乃至三日以内但シ

輕症及慢性ノ者ニハ定日ナシニ於テ其特效藥ヲ應用セバ、該主藥ノ作用
 ニ由リ各其本病ヲ頓挫セラレ若シクハ僅々數日ノ間ニ於テ治癒スベキ
 病性ヲ有スルモノナラザル可カラズ。

茲ニ前述ノ理論ヲ根據トシテ ●余ガ第一著ノ特效藥發見ニ從事シタル
 ハ癩病ナリシモ、余ガ醫籍ニ在ルニ已ニ十有九年ヲ經ルリ今日ニ於テ
 仍ホ余ノ所期ニ反シテ本病ノ治療ニ從事スルノ機會少ナク爰ニ其治療
 方法ニ關シテハ何等ノ成果ヲモ報告シ克ハザルノ遺憾ヲ存スルニ過ギ
 サルノミ(余ノ明治十七年ニ著作セル治癩新論ヲ參看セヨ)。

●第二ニ從事シタルハ結核病殊ニ結核性肺病、結核性腺病、結核性腹膜
 炎、腦膜炎、胸膜炎、痔瘻等余ガ日常最モ經驗シ易キ諸病ナリキ。

結核病ニ關シテハ既ニ明治二十四年余ノ著述セル肺癆豫防論中ニ概述
 セル所アリ、而シテ今日ニ於ケルモ余ハ結核病殊ニ肺結核ガ曾テ學者ノ
 記述セル所ニ反シ非常ニ緩慢悠久ナル經過ヲ取り、又結核菌ト癩菌トガ
 細菌學上太ダ相類似セルノミナラズ、該二病ノ經過最モ緩慢ナルノ性質

於テモ互ニ酷似スルノ點ヲ擧テ諸君ノ注意ヲ促サントスルモノナリ
 (殊ニ肺癆本然ノ經過ニ關スル余ガ探究上ノ結果ハ彼ノ豫防論ニ於テ概
 述セル所アリ、同書ヲ參觀スヘシ)。
 前述二病ノ如ク傳染病中最モ悠久ニシテ最モ緩慢ナル經過ヲ取レルモ
 ノニ在テハ其本性上到底頓ニ之ヲ治癒セシムベキ療法ヲ望ムベキコト
 アラサルナリ、例之ハ梅毒ノ如キハ其特效藥タル水銀劑及沃度劑ニ因リ初
 發ノ者ト雖トモ、仍ホ數月間ノ日子ヲ經ルニ非サレバ輕快若クハ全治ス
 ルヲ得サルベキハ凡テ治療家ノ公認スル所ナリ、況ンヤ癩病及結核病ニ
 至テハ最モ悠久ニ經過スルヲ常トスルノミナラズ、該二病ノ病性タルヤ
 一旦其發病セル後ニ於テハ通例不斷的ノ亢進ヲ致スベキモノナルニ於
 テオヤ、故ニ其血清療法若クハ特效藥ノ發見セラレザル今日ニ於テハ其
 治療法ノ精神ハ該病菌ノ繁殖ヲ防遏シ、其進路ヲ止メ、漸次患部ノ菌體ヲ
 封鎖シ、半年乃至一二年間ヲ以テ遂ニ其病根ヲ斷絶セシムルニ在ルコト
 余ガ經驗上ニ於テ觀破シタル所ナリ、即チ余ガ日常ノ病牀ニ在テ最モ經

驗シ易キモノ例之ハ結核性腺病、結核性腹膜炎及肺結核即チ肺癆等ノ治
 療上ニ就テ論セシニ、彼ノ結核病毒ガ頸腺若クハ腹膜又ハ腸間膜腺等ヲ
 侵シ、所謂結核性腺病若クハ結核性腹膜炎ヲ起スニ至レルトキ、治療家ハ
 此二症ヲ以テ治癒ス可カラザルモノト爲スカ、治癒シ得ベキモノト爲ス
 カ、余輩ハ固ヨリ治癒シ得ベキ者ト認ムルヲ通常ト爲サントスルナリ。
 然ラバ則チ同一ノ結核菌ガ肺組織ヲ侵シ所謂肺癆ヲ起スニ至レルトキ
 ハ設トヒ其患部ノ組織等ハ前者ニ異ナレルモ亦治癒スベシトナスコト
 適當ナルガ如キモ、現今肺癆患者ハ悉ク治癒スベシト明言シ能ハザル
 コト固ヨリ論ヲ待タズ、是レ蓋シ肺結核ガ一般不治ノ病トシテ世間ニ知
 ラレタル所以ナラン、然レトモ親シク本病ノ病性ヲ研究スレバ或ル時期
 ノ間ニ於テ適當ノ治療法ヲ施ストキハ其治癒シ得ベキ疾患ニ算入セラ
 ルベキコト亦自ツカラ明了トナルヲ得、故ニ肺癆ノ治療ニ對シテハ其
 病性上ヨリ觀レバ殊ニ發病時期、症狀等ハ至大ノ關係ヲ有スルモノトス、
 即チ肺結核ノ病者未ダ肺組織ニ於テ持續的ニ甚ダシキ破壊性變化ヲ來

ナルノ時、反言スレバ本患者ガ將來ノ生存上未ダ甚ダシキ障害ヲ蒙ラザルベキ時ニ當リテ早ク本病タルコトヲ診定シ、

第一 治療的ニ

第二 攝生的ニ

百方患者ノ體質ヲ強剛ナラシメザル可カラズ(余ノ肺癆豫防論ニモ其旨意ヲ略述セリ)、隨テ余ガ結核病治療法ハ已ニ彼ノ梅毒ニ於テ實行セラレツ、アル一種ノ封鎖的治療法ニ等シク凡ソ藥物界中結核菌ニ對シテ最モ有力ノ作用アルモノヲ取り、其病性ニ適合セル應用方法ヲ經驗スルコト已ニ十餘年間ニ亘レリ、要スルニ其目的ハ梅毒ノ封鎖的治療法ニ於ケルヨリモ一層ノ長時日ヲ期シ、漸次ニ結核病毒ヲ封鎖セシムルニ在リ、然ルトキハ彼ノ猛惡ナル結核菌ガ設トヒ或ル時期ノ間體內ニ棲息スルモ、其患者ノ血液ヲ始メ組織全體即チ體質愈佳良強剛ナルニ至レバ四面宛モ強壁ヲ築キ立ルノ作用ヲ逞ケスルニ由リ、細菌學上ヨリ見ルモ其繁殖本來困難ナル所ノ結核菌ハ結局枯死ノ運ニ陥ルヘキノミ、例之ハ

彼ノ米、麥、蘇苔等諸種ノ種子ヲ囊中ニ納メ若クハ机上ニ放置スルカ或ハ之レヲ石田ニ投ズルモノニ異ナラスシテ、到底沃地ニ下セルモノ、如ク繁茂シ得ベキノ理ナキナリ、是レ余ガ肺結核等ニ對スル治療方法ノ精神ニシテ即チ一ニハ藥物ニ由テ細菌學上最モ繁殖シ難キ性ヲ有スル結核菌ニ對抗セシメ且ツ之レニ必要ナル病者ノ體質ヲ改良セシムルノミナラズ傍ラ吸氣藥ノ如キヲ應用シテ大ニ肺質ノ人工的運動ヲ營マシメ、一ニハ患者ヲシテ漸次充分ノ勞動ヲモ努メシムルニ至ル等、百方患者身體ノ強剛ナラシメトナ期シ、以テ病竈ヲ封鎖スルノ目的ヲ達シ、而シテ畢竟ハ現在ノ症狀ヲ漸次ニ全滅セシムルノミナラズ、將來ト雖トモ亦再ヒ同症ノ發作ヲ來サマラシムルヲ期スルモノナリ、是レ亦余ガ肺癆豫防論ニ於テ當時盛ニ實行セラレタルコソフ博士ノツベルクリン注射療法ヲ目シテ肺癆ノ病性ニ背馳セル方法ト評シタリシ所以ナリ。前述セル所ハ余ガ結核病ニ對シ今日ニ至ル迄十有餘年間實行シ來レル治療方法ノ精神ニシテ、實際彼ノ梅毒療法ニ等シク結核病ヲ封鎖シ得テ

現症ノ全治(治愈)十年ヲ經ルモ再發ナキモノ、如キ之ヲ全治ト云フモ妨
 グナシ若クハ輕快ヲ得セシメタルモノナリ、故ニ余ハ曾テ在職セシ病院
 ニ於テモ余ノ診察場ニ於テモ現今慣用セラル、所ニ反シ絶テ「クレオソ
 ート」(グワヤコール)「炭酸」(グワヤコール)「トベルクリン」等ヲ療則的ニ使用
 シタルコトナキハ已ニ肺癆豫防論ニ記述シ置ケルガ如シ。

●第三ニ從事シタルハ脚氣ナリ。

余ハ我邦ニ有名ナル一病即チ脚氣ニハ其因縁甚ダ薄ク、明治十三、十四、十
 五年ノ交ニ在リテ大學醫學部在職中脚氣研究ノ緒ヲ開キシモ、之ヨリ以
 降四年前ニ至ルノ間ハ不幸ニモ余ハ脚氣病ニ接スルコト鮮ナク、曾テ希
 望セシ如ク脚氣病者診療ノ結果ヲ親シク目撃スルノ期ナカリシガ、概近
 四年ノ間ニ於テハ余ガ診療セル本病ノ患者稍、少數ナリシニモ拘ハラズ
 其療法ニ於ケル必要ノ結果ハ正ニ之ヲ認識スルノ幸ヲ得タリキ。
 脚氣ハ曾テ余ノ推考スル所ニ隨ヘバー、ノ下等機生物ニ基因セサルヲ得
 サルモノニシテ其始メ主モニ皮膚、内臟、筋質等諸器官ニ分布セル末梢神

經ノ間質ヲ侵シ、其神經纖維ヲ變性セシメ且ツ脊髓ノ(間質?)軟膜部ヲモ襲
 ヒ爾カモ彼ノ多發性神經炎トハ全ク異ナレル一種特別ノ傳染病ナリ。
 故ニ其初發ハ通常兩下肢若クハ四肢或ハ全身ノ倦怠ヲ以テ始マリ、之ニ
 次テ多クハ四肢ノ皮膚局部ニ知覺異常(蟻走感)知覺鈍麻等或ハ下肢ノ重
 感、緊張等或ハ食思不振、腹部殊ニ胃部ノ停滯緊滿若クハ心機亢進、便秘、下
 肢ノ浮腫等ヲ以テ起始スル者アリ、或ハ又初期ヨリシテ已ニ右ノ數症ヲ
 兼發スル者アリ、而シテ初期ノ間ニ在テハ或ル病症特ニ局發性蟻走感(症
 狀ノ如キハ日々ニ出沒シ、或ハ僅微ノ症徵ヲ持續シ、若クハ漸次之ヲ増劇
 シ、又多クハ餘病ノ併發、發熱、急性胃腸加答兒、分娩勞動、疾走、熱浴等種々ノ
 誘因ニ由テ急速ニ増悪シ、若クハ此等ノ諸因ニ由テ始メテ誘起シ來ル等
 其狀態區々ニシテ一ナラス、願フニ脚氣ハ斯ノ如キ病性ノモノナルヲ以
 テ余輩治療家ハ其患者ノ療法ニ就キ細心注意此病性ヲ基本トシテ考索
 セサル可カラサルナリ。

然ラハ則チ脚氣ノ病性ニ於テハ最モ其治療上ニ緊要ナル指兆トシテ特

ニ注意ヲ要スルノ點ナキコアラズヤ、是レ余輩ノ第一着ニ注目スベキ所ナリトス。

即チ汎ク世人ノ喧傳スル如ク脚氣病者ガ本病ノ自然的治癒ニ適セル或ル山間若クハ海邊等ニ轉地スルヤ、其現發病症ハ隨テ多少輕快シ、若クハ自然ニ治癒シ、殊ニ著レシキ場合ニ在テハ本病稍重候ヲ呈セントスル者轉地ノ後頓ニ輕快シテ速ニ治癒ニ赴キ、或ハ轉地シテ殆ント快治セシ者發病地ニ歸住シテ忽チ脚氣症狀ヲ増進セシニ由リ更ニ轉地シテ再ビ容易ニ輕快スルガ如キハ決シテ少ナカラザルノ事實ナリ、其他又本病初發ノ時期ニ於テ脚氣ノ或ル症狀ガ僅々ノ時日間ニ在リテ隱見スルガ如キハ蓋シ他ノ疾病ニ於テ其類例鮮ナキモノナラン。

前述セル如ク脚氣ノ病性タルヤ或ハ其現症頓ニ増進シ來リ、或ハ速ニ減退シ又消失スルモノナルコトヲ認知セル已上ハ其病性上ヨリ推シテ或ル適藥ニ遭ハハ恰モ彼ノ轉地ニ由テ輕快若クハ治癒スル如ク、急速ニ其病症ノ消滅ヲ期シ得ベキコト之ヲ觀破ルスニ難カラザルナリ。

余ハ此病性ヲ以テ治療方法ヲ考究スベキ立脚點トナセルコト已ニ久シカリキ、再言スレバ若シ脚氣ノ特效藥ヲ發見シ得タランコトハ、其初期ノ病症ハ或ハ速ニ輕快シ或ハ殆ト頓挫的ニ治癒スベキコト脚氣固有ノ病性上ヨリ明白ナリト斷定シ得タリキ、即チ余ハ余ノ自認セル立脚點ニ據リ其特效藥發見ニ焦思シタリキ。

是ニ於テ余ハ本邦新古ノ脚氣療法ヲ按スルコト古來ヨリ今日ニ至ル迄主トシテ下劑及利尿劑等ヲ慣用シ、若クハ毎歲發病時期ニ至レバ轉地ヲ命ズル等ヲ以テ其療法トナシタリシガ、余ヲ以テ之レヲ觀レバ脚氣ニ對スル下劑及利尿劑ノ如キハ恰モ余ガ脚氣患者ニ稱用セル芥子泥稀ニ芫菁膏貼用ニ等シシ皆其誘導法タルニ過キズシテ、他ノ誘導法ヲ要スル病症ニ應用スル者ト全然同一理ニ基ツシガ故ニ余ハ固ヨリ此等新古ノ脚氣療法ヲ擧ゲテ真正ナル治療法トハ認メザリシナリ。

然ラバ則チ脚氣ニ對スル真正ノ治療法ハ現今世ニ存スルヤ否ヤ、余ハ從來之アルヲ見聞セズ即チ余ハ今日真正ノ脚氣治療法ナルモノナント斷

言セシノミ。

然ルコ余ハ先年來余ノ認メテ以テ脚氣ニ對スル特效アリト爲セル一藥ニ就キ周密ニ其應用及適量ヲ研究セシニ、今ヤ本品ガ唯一ノ脚氣特效藥タルコトヲ断定シ得ヘキニ至レリ。

余ノ脚氣特效藥ハ其症候ノ輕重ヲ問ハズ、概シテ脚氣病ノ初期ニ應用スレバ其神經症狀ナル知覺異常等ハ最モ速ニ殆ント頓挫的ニ消失ニ赴キ、心機亢進症狀ノ如キモ亦次テ減退シ、數日ノ間ニシテ諸症洗フガ如ク輕快スベキヲ以テ曩ニ醫家ヨリ其重症ナルヲ以テ寸時モ早ク轉地スベキヲ告ケラレタル患者ト雖トモ、余ガ治療ノ三日後ニハ身神爽快トナリ、近隣ノ遊歩ヲ試ミルニ至リシ如キ其例ニ乏シカラズ、又余ノ特效藥應用ノ後先ヅ速ニ蟻走感覺等ノ神經症狀消失シ去ル者多ク、未ダ曾テ病徵ノ増加シタル者アルヲ見ザルナリ。

此藥物ノ奏効タルヤ余ガ前述ノ推定即チ「脚氣ニ特效藥ヲ應用セバ恰モ適當ナル地ニ轉療セルモノニ等シキモノ」ヲ「ラント」ノ豫言ヲ實ニセルモ

ノナリ然レ夫ノ轉地ノ途中病症ノ増劇ヲ來シ以テ死ヲ致スガ若キ危險アルコトナク、固ヨリ安全ニ轉地療法ニ優レルコト鮮々ナラザルナリ。

余ノ特效藥ヲ脚氣患者ノ初期中ニ於テ其病症ノ急進ヲ來リタル者ニ應用スレバ、其急劇症狀ハ僅々一兩日間ニ在テ殆ント頓挫セラレ去ルコト由リ、惡心嘔吐ハ容易ニ鎮止シ、食氣振ヒ、蟻走感ハ甚ダ速ニ消失シ、之ニ次テ皮下ニ走行スル神經細枝ノ壓痛、頸部以下ニ於ケル皮質及筋質ノ壓痛、主トシテ胸椎部ニ於ケル棘狀突起上ノ壓痛等ハ漸徐ニ退消スルニ至リ、心悸亢進、呼吸困苦、胃部緊滿等モ相前後シテ減退スル等最モ速ニ治績ヲ奏スベシ、但シ發病後已ニ多クノ時日ヲ經タル者ニ在テハ神經症狀ハ稍速ニ消失シ去ルト雖モ、運動機ニ關スル筋質ノ機能等ハ神經ノ症候ヨリモ徐々ニ治ニ就クヲ常トセリ。

是ニ由テ之ヲ觀レバ脚氣ニ特效ヲ奏スル藥品ハ先ヅ速ニ其罹病ノ原地ナル神經ノ障害ヲ驅除シ得ルモノニ在ルベシ、之ヲ換言スレバ脚氣ノ神經症狀ヲ速ニ治癒セムルモノハ則チ本病ノ特效藥ト云フヲ得ベシ。

前述ノ如ク余ハ已ニ余ノ實驗上ニ於テ脚氣ニ特效藥アリトノ推斷ヲ確
認シタリ雖トモ尙ホ經驗ヲ要スル所アルニ由リ今日未ダ之ヲ發表スル
ヲ得ズ只特效藥發見ノ順序トシテ姑ク之ヲ報告セントスルノミ。

●第四ニ從事シタルハ腸窒扶斯ナリ。

腸窒扶斯モ亦余ガ曾テ大學醫學部ニ在職セル際其傳染病室ヲ擔任セシ
以來余ガ治療場裏ニ於ケル好友ナリシガ後テ九州地方殊ニ鹿兒島ニ在
リシ時ノ如キ三年間僅ニ二名ノ自宅治療患者ヲ見シニ過キズ然レトモ
去ル明治二十二年以來傳染病室ヲ備フル神戸病院在職中ニ於テハ稍其
治療方法ヲ研究スルノ機會ヲ得腸窒扶斯ノ初期ニ甘汞下劑ヲ處シテ其
熱候一時下降スルノ徵ヲ呈スル者ハ爾後甘汞下劑ノ反復ニ由リ(但シ二
三日間ヲ隔テ一ニ回ノ使用ニ止ム)尙ホ多少下降セシメ得ベシ其熱候ハ
爾來稍良性ノ經過ヲ取リシモノ多カリシコトヲ認メタリシガ概近三年
間ニ於テハ大ニ余ノ腸窒扶斯治療法ヲ一變セリ即チ其患者頭痛便秘食
思不振惡寒發熱ヲ呈シ熱候ハ數日ノ間漸昇シ來リ加之ナラズ脾臟ハ多

クハ之ヲ觸診シ得ル等概シテ腸窒扶斯ノ初發タル症候ヲ具備シ他病ト
誤診シ易キ症候殊ニ少ナキ者ニ對シテ余ガ認ムル所ノ主藥ヲ應用スレ
ハ大約兩三日以内ニ在テ漸々下熱シ頭痛ハ去リ食思ハ漸ク振起シ來ル
ガ如ク其諸症全ク頓挫セラレ去リ而シテ下熱ノ後ハ容易ニ全治ニ赴キ
毫モ病症ヲ貽留セザルノ經驗ヲ得タリ然レトモ元來病床上腸窒扶斯初
發ノ診斷ハ往々困難ナルコトアルノミナラズ近時細菌學上其診斷方法
ノ完備シツ、アルヲ以テ他日該方法ヲ應用シ先ツ窒扶斯患者ノ初期ニ
於テ確ニ其腸窒扶斯タルコトヲ診定シ然ル後チ主藥ノ作用如何ヲ試ム
レバ則チ其奏効ノ真偽ハ容易ニ之ヲ鑑別シ得ベケン然レトモ今日ニ在
テハ未ダ全ク疑團ヲ脱スルコト能ハザルヲ以テ姑ク之レヲ發表スルヲ
得ズ故ニ余ガ特效藥發見ノ順序トシテ單ニ之ヲ一言ニ置クニ止メント
スルモノナリ。

●第五ニ從事シタルハ則チ本日講演ノ問題タル所ノ赤痢ナリ。

赤痢ニ關シテハ如何ナル一定ノ治療方法アリヤ余輩ハ今日ニ至ル迄未

其確實ナルモノアルヲ見聞セザルナリ。

赤痢ハ近年殊ニ夏季ニ當リ毎歲數万人ノ病者ヲ出ダシ其ニ我邦現時ノ一大災害タルヲ免カレザルモノナリ、蓋シ本邦赤痢ノ大流行ハ今ヲ距ルコト凡ソ十八年前即チ明治十四年ニ長崎熊本ニ多發シ、同十六年ニ熊本ノミニ一万余人ノ多數ヲ出スニ至リ、同十七年ニハ四國ノ徳島愛媛等ヲ襲フテ、一万八千ノ患者同十八年ニハ二万四千ノ患者ヲ出シ、其他諸縣ニモ蔓延セシ時ヨリ連年反復シ來ルモノナリ、然レトモ本來赤痢ハ熊本若クハ四國ヨリ起リシコトハアラズ、恐ラクハ其始メ或ル熱帶地方ヨリ其病毒ヲ流入セシメタルヤモ知ル可カラズ、而シテ先ヅ九州各地ニ蔓延シ、遂ニ四國ノ各地方ヲ侵スニ至リ、殊ニ去ル明治十七八年ノ交ニ於テ彼ノ徳島愛媛ノ兩縣下ニ非常ノ蔓延ヲナシタリシモノ、蓋シ本邦近年赤痢大流行ノ基原ナランカ。

恐クハ熱帶地方ヨリ流入セル赤痢ハ初メ先ヅ其流行ノ根據地ヲ九州及四國ニトシ、之ヨリ年々中國關西各地ニ轉輸シテ漸ク流行區域ヲ擴メ、兩三年來ハ遂ニ我關東地方ヲ襲ヒ、昨三十年ニハ全國ノ病者數其届出ヲ爲シタル者ノミニシテ無慮十萬人ノ多キニ至リ、不幸ニモ其四萬人ハ死亡セリ、而シテ昨三十年一月ヨリ五月迄ニハ全國ノ赤痢病者數ハ四百六十四人、死亡百二十五人アリシモ現ニ本年ハ去ル一月ヨリ五月ニ至ル同時期ニ於テ全國ノ患者ハ已ニ七百四十四人、死亡二百三人ヲ生セシニ由テ知ルベキ如ク、之ヲ昨年ニ比スルニ本年度ノ赤痢ハ一層其流行ノ勢ヲ増シ、患者ノ死亡數モ比例上ニ増加ヲ示セリ、豈恐レザル可ケンヤ。

回顧スレバ余ハ今ヲ距ル八年前即チ明治二十四年八月ノ交兵庫縣神戸市ニ開會セル日本私立衛生會支會ノ依頼ニ應ジ、赤痢豫防ニ關シテ演述セシガ、當時余ハ謂ヘラク近年ノ如ク赤痢連年我邦ニ流行スルハ内國ノ大災害タルハ言フ迄モナク、我國際ノ關係上ニ於テモ至大ノ影響ヲ及ボスヘキヤ世人ノ夙ニ注意スル所ナラン、然ルニ該病ハ腸窒扶斯、虎列拉等ニ同シク個人的ノ豫防法最モ明白ニシ、其病毒ハ主モ排泄物中ニ存在スルモノナリ、故ニ全然之ヲ消毒シテ其病毒ノ生存スル者ナキニ至ラン

メ、又一方ニハ該病毒ガ人體ニ竄入シ來ルベキ徑路ハ主トシテ食物ニ在
 ルヲ以テ第一ニハ嚴ニ患者ノ泄便ヲ消毒シテ無害トナラシメ、又病毒ノ
 搬送者タル飲食物ハ必ス煮沸シテ後取用スルコトセバ赤痢等ノ感染ヲ
 免カル、ト必然ナラン、故ニ官私ノ間熱心豫防ニ盡瘁スレバ必ス此災害
 ナ免カル、ノ結果ヲ得ント、然レモ其實行ヲ期スルコト難キニヤ前述ノ如
 シ爾來年々多數ノ患者ヲ出シテ殆ント底止スル所ナキガ如キハ嘆スベ
 キノ限リナリ、畢竟赤痢ニハ殊ニ輕症經過ノ者甚ダ多キガ如キ其蔓延ノ
 一大要素タラン。

豫防已ニ其功ヲ收メ難シトスレバ益、療法ニ重キヲ措カザル可カラズ、然
 ルニ世上未ダ本病ニ對スル確實有効ノ治療法アルヲ聞カザルハ我衛生
 上及醫學上ノ最大遺憾ト謂ハザル可カラザルナリ。
 從來赤痢ノ療法中特ニ我邦ニ汎用セラル、ハ彼ノ熱帶地方ニ於テ創始
 セラレタル甘汞及蓖麻子油ヲ併用スル下劑的療法若シハ多量ノ吐根ヲ
 反復シテ與フル等諸種ノ方法アリ、然レトモ該療法ニ由リ頓挫的ニモ漸

徐的ニモ赤痢ヲ治癒セシメ得可カラザルハ該病ノ流行今日ノ如ク廣大
 ナル際ニモ已上ノ諸療法ニ由テ本病ノ治癒セラレタル報告ニ接セザル
 ナリ以テ證スルニ足レリ。
 其他斬新ナル赤痢療法ハ會テ北里博士ノ唱道セラレタル規尼涅ノ灌腸
 法(其刺戟稍強シ)ニシテ、次ニハ從來及今日ニ於テモ屢實用セラル、次硝
 酸蒼鉛ヲ多量ニ服用セシムルノ法等數種アレトモ、余ハ經驗上此等ノ諸
 法ガ赤痢ノ治療法タルベキ真正ノ價值アルヲ認ムル能ハザリキ。
 前述ノ如ク我邦ニ在テハ本年ニ至ル迄已ニ十餘年間ニ亘ル赤痢ノ大流
 行ヲ來シ毎年罹病者ノ數ハ届出ト届漏レトチ合セ恐クハ十五萬已上二
 十萬ノ多數ヲ出スノ時ニ在リト雖トモ、未ダ赤痢ニ對スル確實ノ治療方
 法アルヲ聞カズ、又本邦醫學社會ニ信用セラル、獨逸醫家ノ著作中殊ニ
 著名ナル内科書ト雖トモ尙ホ且ツ一定ノ療法ヲ掲グルモノナシ、豈亦遺
 憾ナラズトセンヤ、余ハ參考ノ爲メ彼ノ獨逸醫家有名ノ著作ヨリ赤痢ノ
 治療法ヲ爰ニ列舉シ。

第一ニ諸家ノ赤痢治療法ニハ定説ナク。

第二ニ諸家ハ赤痢ヲ頓挫シ得ベシトノ思想ナク、隨テ今日尙ホ赤痢ニ對スル特效藥ヲ存セズ。

第三ニハ諸家ノ赤痢療法ニハ一定ノ方法ナク、單ニ彼此藥品ヲ試用シ、隨テ治セザレバ隨テ療法ヲ轉シ、赤痢ノ治療上尙モ定見ナキヲ示サントス。即チ現今最モ信用ヲ博セル獨逸諸家ノ著作ニ就キ其赤痢治療法ヲ摘出シテ略述スレバ次ノ如シ。

(第一)博士アイヒホルストノ赤痢療法ハ

- (一)緩下劑トシテ蓖麻子油、甘汞等ヲ應用シ。
 - (二)重症ニハ陀氏散ニ甘汞ヲ配伍シテ與ヘ。
 - (三)瀉腸ニハ五十倍乃至二十五倍ノ撒里矢爾酸氷水ヲ處セリ(願フコ本方ハ烈シキ刺戟痛ヲ起シ患者サシテ堪ヘ難カラシムルナラン)。
 - (四)裏急後重ニハ阿片、莫兒比涅、古加乙涅ヲ處セリ。
- (第二)博士ベルツ(在日本)ノ赤痢療法ハ

- (一)吐根末一〇乃至二〇ノ頓服。
- (二)甘汞〇・五ノ頓服ニ次キ蓖麻子油三〇〇ヲ頓服セシメ、後チ毎三時間ニ前量ノ甘汞及蓖麻子油ノ頓服ヲ反復セシム(本方ノ反復ハ患者ノ嫌忌スルコト多キノミナラズ余ハ從來ノ經驗上三回以上ノ反復ヲ禁忌セリ)。

- (三)石榴根皮赤酒劑(同皮三〇〇、煎液三〇〇〇ノモノ)一日三回毎服三〇〇ツ、用フ、但シ服用前ニ於テ蓖麻子油ヲ頓服セシム。
- (四)硝葦二〇乃至一〇〇又ハ撒曹一〇ヲ持長ス。
- (五)上記ノ療治ニシテ奏効ナキ者ハ二百倍ノ銀水、百倍單寧水、明礬水等ヲ瀉腸料ト爲シ以テ局處的療法ヲ施ス。

第三博士コイマイエル及ザイツノ赤痢療法ハ

- (一)諸種ノ下劑ヲ應用シテ甘汞ヲモ使用シ。
- (二)吐根ヲ用キ又阿片ヲモ應用ス。
- (三)腹痛裏急後重ニハ阿片ノ多量ヲ處シ且ツ甘汞ヲ配伍ストアリ、又單

寧鉛糖等ヲ應用ス。

(四)若シ阿片効ナキハ硝酸銀ヲ用ユ。

(五)灌腸法トシテ百倍乃至五十倍ノ銀水ヲ用ヒ、一日數回灌腸スベント記セリ。

(第四)博士ストリニムベルノ赤痢療法ハ

(一)三〇〇乃至六〇〇ノ蓖麻子油ヲ處シ、患者若シ其服用ヲ嫌忌スルハ大黃浸(一〇〇)一〇〇〇ヲ與フ。

(二)硝蒼ヲ稱用シ。

(三)南方諸邦ニテハ吐根一〇―二〇若クハ甘汞〇・五―一〇ノ頓服ヲ稱用スト記シ。

(四)灌腸料トシテ硝酸銀〇〇・五乃至〇・三ヲ六〇〇乃至一〇〇〇ノ水溶液ト爲シ灌腸セシメ、且ツ鉛糖〇・一乃至〇・五鹽剝一〇乃至一・五等ヲ處スト記セリ。

(第五)博士シユルゲンゼンノ赤痢療法ハ

(一)蓖麻子油、大黃等ニ由テ充分下利セシメタル後ナ吐根ヲ與ヘ。

(二)裏急後重ニハ五十倍ノ食鹽水ヲ用ヒテ直腸ノ洗滌法ヲ施ス。

(第六)博士チイレノブルヒ醫科酌府(卷七)ノ赤痢療法ハ

(一)局處療法ヲ第一ト爲シ、五十倍乃至二十五倍ノ撒里矢爾酸氷水多量ヲ以テ一日二三回洗腸願フニ實用ニ堪フル患者ハ鮮ナカルベシ、但シ石炭酸水ハ中毒シ易シトナセリ。

(二)裏急後重ニハ阿片又ハ古加乙涅坐藥ヲ稱用シ、疝痛ニハ罽布又ハ氷嚢ヲ貼用ス。

(三)局處療法ヲ補フニ内服藥ヲ以テセリ、即チ甘汞〇・五及蓖麻子油ヲ與ヘ、便塊ヲ除クベトセリ。

(四)上圖頻繁ナルモノニハ吐根ヲ用フ即チ挖氏散〇・三甘汞〇・〇三右毎三時一包ヲ與フ、又吐根浸(一・五)二〇〇〇阿片〇・一右毎時一食匙ヲ處セリ。

(五)慢性ノ者ニハ「カル、ス」泉等ノ鍍泉ヲ處シ。

(六)其他赤痢ニ應用セル藥品ハ極メテ多數ナルモ左ニ重要ナルモノヲ
舉クレバ收斂藥ニハ單寧、鉛糖、硝酸銀、明礬、古倫僕、麥角等、又麻醉藥、下劑、
吐劑、拔爾撒謨劑、防腐劑ノ内服及酸類等ナリトセリ。

赤痢ノ療法トシテ擧ゲラレタル者其他尙ホ多數ナルベシ、然レモ我邦赤
痢ノ大流行多年ニ亘リ其患者全數ハ百五十萬乃至貳百萬ニモ達シタル
今日ニ於テ之ニ對スル確實ノ療法ヲ報告スル者ナキヲ以テ觀レバ以上
ノ諸療法及其他從來ノ方法ハ汎ク本病ニ適スルモノニ非ザルヲ證スル
ニ足レリ、矧シヤ此等ノ療法ニ由テ赤痢ヲ頓挫セシムルノ治驗ニ至テハ
固トヨリ絶無ナリト云フヲ得ベキナリ。

余ハ已ニ明治二十二年ノ頃ヨリ 赤痢ノ治療方法ニ就キ深ク考
究セル所アリ、第一前ニ述ベタル如ク其初期ニハ先ヅ甘汞及蓖麻子油ヲ
併用スルニ患者ハ爲メニ一時ノ快通ヲ覺ヘ、稍輕快ヲ訴フルモノ鮮カラ
ザリキ、而シテ此下劑服用後ニ於テ或ハ他藥ヲ兼用シテ前方下劑ノ併用
ヲ反復シ、或ハ前方下劑ノミヲ反復スルコト兩度ニ至ル等種々ノ療法ヲ

試ミテ其成績ヲ驗査セシニ遂ニ其結果トシテ就中 甘汞及蓖麻
子油若クハ他ノ下劑ノ服用後ニ於テ直チニ少量ノ結晶
硝酸銀ヲ服用セシムルノ最も有効ナルコトヲ認メ得タ
リ、而シテ從來余ノ施行セル此銀療法ヲ以テハ通常五六日間ニ於テ治癒ニ
就ク者多ク(但シ輕症赤痢ニアラズ)、其一週以外ニ亘ル者ハ殆ソト之レナ
カリキ、爾來經驗ヲ重ヌルニ從テ余ノ赤痢治療法ハ愈著効ヲ奏シ、何時之
ヲ應用スルモ其目的ヲ達セザルコトナク、全ク爾餘ノ治療方法ヲ願ルノ要
ナキコトヲ認定スルニ至レリ、然レモ前記 治癒日數ニ就テ見レバ其
有効ナル用量如何ニ至テハ尙ホ之ヲ明定シ得ザルノ遺憾ヲ免カレ
ザリキ、聞説ク夫ノ戰闘ニ際シテ砲丸ヲ交フルヤ陸地ニ在テハ先ヅ敵軍
トノ距離ヲ測定シ海上ニ在テモ豫メ敵艦ノ距離ヲ測量シ以テ發射スル
所ノ彈丸ハ可望ノ最大勢力ヲ以テ敵軍若クハ敵艦ニ命中スルノ功ヲ奏
シ得ベシト、然レモ艦内裝置ノ砲力ハ三千迷突ノ敵艦ヲ襲撃シ得ベキモ
ソニシテ若シモ敵艦ガ五六千迷突ノ遠隔距離ニ出現スルキハ奈何シテ

之的中スルヲ得ベキヤ。即チ距離適度ニ至ル迄前進セザルヲ得ザルハ勿論ナラン。然ラハ則チ我藥物中其特效藥ノ特效作用ヲ選ウセシムルニハ宛モ戰術上ノ測量ニ等シク或ハ病症ニ應シテ其主藥ヲ増減シ或ハ他藥ヲ兼用シテ其特效作用ヲ完全ナラシメ其果シテ命中スルヤ單ニ一回ノ藥用ニ由テ其病患ヲ驅除シ得ルコトアリ。例之ハ「マラリヤ」病ニ規尼涅ノ適量ヲ頓服セシメ若クハ規尼涅ニ砒劑ヲ兼用スル等ノ如キ即チ是ナリ。例之ハ我邦ノ隔日性若クハ日發性間歇熱ニ對シテハ

鹽酸規尼涅 一〇乃至一三

チ膠囊若クハ「オプラート」ニ包ミ若クハ丸トナシ發作前六時間ニ頓服セシメ又本病發作ノ已ニ二三回ナルヲ訴ヘ來ルモノニハ前方中ノ最多量即チ一三ノ鹽規ヲ發作六時間前ニ頓服セシメ更ニ此六時間ヲ距ルコト尙ホ五六時間以前多クハ臨臥ノ時ニ於テ〇五内外ノ鹽規ヲ頓服セシムベク又尙ホ輕便ニシテ確効ヲ奏スルハ規尼涅ト左ノ處方ヲ併用スベキナリ。

法列兒水 五滴乃至七滴 薄荷水 適宜(一〇〇〇)

右毎食後一回一日三回ニ分服セシメ若シ連服ヲ要スルハ數日ノ後法水ヲ減量スベシト雖モ久シキニ亘リテ持續スル勿レ但シ本病ニハ殆ト他藥ヲ要セザルニ由リ右ノ水劑ハ診斷即日ヨリ與ヘ尙ホ向來ノ發作ニ向テ六時間前ニ鹽規一〇乃至一三ヲ頓服セシム余ハ本邦ノ間歇熱ニ對シテハ前述ノ治療方法ニ由テ其頓挫シ得ベキ者タルコトヲ經驗セリ。凡ソ醫藥ニ其特效作用ヲ具フルモノ此「マラリヤ」ニ對スル規尼涅ノ如キ奏効アリトスルモ醫家若シ其應用ヲ等閑ニシ或ハ適藥ノ量ヲ減シ若クハ其量ハ充分ナルモ尙ホ一日間二三回ニ分服セシムル等ノ「アラバ」設トヒ特效作用アルモノト雖モ決シテ確實ノ奏効ヲ望ム可カラス。故ニ我赤痢病ノ治療ニ關シテモ亦彼ノ「マラリヤ」病頓挫療法ノ如キ關係ナカラザルヲ得ズ前ニ述ベタル六博士ノ赤痢治療法ヲ見ルモ蓋シ思半ハニ過グルモノアラフ獨トリ前述六博士ノ赤痢療法ノミナラズ凡ソ傳染病ニ關スル從來ノ療法ハ僅々數種ヲ除クノ外概シ皆對症的方法ニ屬スル

モノニシテ腸窒扶斯、虎列拉、脚氣、格魯布性肺炎等ニ對スルモノ比々皆然ラザルハナキナリ。

我赤痢ノ療法モ亦今日ニ至ル迄ハ便ナ對症の療法ノ區域内ニ在リシヲ以テ今前述諸家ノ赤痢療法ヲ見ルニ、

(第一)概ネ下劑ヲ應用セルモ赤痢ハ必ズ下劑ニ由テ治癒スベキモノニ非ザルヲ以テ或ハ硝蒼等諸種ノ收斂藥ヲ稱用シ、次デ麻醉藥ヲモ應用スルニ至ル、然ルニ該療法ノ精神タル素ト對症の療法ニ在ルガ故ニ其奏効極メテ不定ニ屬シ、未ダ認メテ真正ノ療則ト爲スベキモノニアラザルナリ。

(第二)近年ニ至テハ前述療法ノ他殊ニ赤痢ノ局處的療法大ニ唱道セラレ、隨テ諸種ノ藥品ヲ此目的ニ應用セリト雖モ、是レ亦本病ニ對スル真正ノ治療法タル價值アルヲ肯ズベキモノニ非ス、況ンヤ頓挫ノ効ヲ奏セシムベキ希望ヲ屬スルニ於テオヤ蓋シ主モニ腸管ヲ侵ス所ノ傳染病ニ灌腸法ヲ應用スルハ彼ノ伊太利ノカンタニー博士ガ虎列拉病ニ灌腸法

ヲ稱用セルヨリ始マリ、大ニ他ノ諸病ニモ應用セラル、ニ至リシモノナラン。

畢竟余ガ研究上ニ於ケル結果トシテハ凡ソ傳染病中主トシテ其腸管ヲ侵シ來ルモノニ對シテ之ヲ頓挫セシムベキ治療法ノ精神タルヤ

第一ニ其應用スベキ特效藥即チ頓挫藥ヲ確定シ

第二ニ其頓挫シ得ベキ時期即チ各病特異ノ病性ニ從テ之ヲ

應用スルノ方法等ヲ確ムルニ在ルコト勿論ナリ

是ニ於テカ余ハ彼ノ軍事的測量術ニ於ケル如ク赤痢ニ對スル硝酸銀ノ適量ヲ測定セシ際、恰モ敵艦ガ三千迷突ノ距離ニ在ルヲ測定シテ之ニ砲丸ヲ的中セシムルニ等シ、銀ノ適量ヲ測量的ニ増進セシニ即チ銀ハ赤痢ニ對シ特效ヲ奏スルコトヲ知り得タルノミナラズ、進ンデ其頓挫藥タルコトヲ確定スルニ至リタルナリ。

余ハ既ニ傳染病中適當ノ療法ニシテ發見セラレタランコトハ必ズ頓挫シ得ベキ病性ノモノアルベシトノ事ヲ豫定シテ之ヲ概述シタルガ赤痢

ハ即チ此頓挫シ得ベキ病性ヲ具フルモノ、一ナリ、故ニ其特效藥ノ果シテ發見セラル、ニ至レハ能ク之ヲ頓挫スルノ効ヲ奏シ得ベキヤ必然ナリ、然ルニ各疾病ガ其病狀ヲ異ニシテ經過スルガ如ク其病性モ亦自カラ相異ナラザルヲ得ズ、是ヲ以テ各異ノ病性ヲ具フルノ各疾病ハ能ク其特效藥ニ由テ頓挫セラルベシト爲スモ、其頓挫セラルベキ時期ニ至テハ復々互ニ相異ナラザルヲ得ザルベシ。

故ニ余ガ發見ノ特效藥ヲ以テ赤痢ヲ頓挫セシムルハ赤痢ノ本性殊ニ其發病時期ニ注目セサル可カラズ、即チ赤痢ヲ頓挫シ得ベキ時期ハ其病症ノ輕重ヲ問ハズ、特ニ其初發期詳言スレバ發病後大約二日若クハ三日以内ニ在ルガ如シ、然レトモ各病者ニ於ケル病性ニ因リ發病後四五日ヲ經タル者若クハ稍久シキ經過後ノ者ト雖モ、尙ホ且ツ容易ニ頓挫シ得ルコトナキコアラズ、但シ特效藥ノ頓挫作用ヲ呈スル時期斯ノ如ク一定ナラザルハ固トヨリ例外ノ場合ニシテ常態ト認ム可カラズ、而シテ此頓挫作用ノ一定セザルモノアルハ主トシテ腸粘膜ニ於ケル赤痢

性變化ノ狀態即チ潰瘍性變化ノ性狀、其發生、新舊、大小、強弱等ニ關スルモノナラン。

赤痢ヲ頓挫セシムルニハ前述ノ時期ヲ必要トスルモ、其特效藥ノ應用ニ至テハ各病者ガ何等ノ時期ヲ以テ醫治ニ就クニ論ナク其用量ヲ變更セズシテ可ナルベシ、然レトモ特效藥ノ服用ニ先ダテ必ず先ヅ下劑ヲ應用スルヲ要ス蓋シ本病ニ下劑ヲ用フルハ(一)腸粘膜ノ變化ニ對シ誘導法タルノ作用アルノミナラス、(二)便塊アルモノハ勿論本病固有ノ便質ヲ存スルトキ始メ速ニ之ヲ下泄セシムレバ能ク腸内ノ有害物ヲ排除シ、(三)之ニ後續シ來ルベキ微量ノ特效藥ヲシテ太ダ廣汎ナル腸粘膜ニ對シ若クハ粘膜面ニ存スル赤痢病毒ニ對シ親密ニ接觸シテ之ニ感得シ易カラシムルノ利益アレバナリ。

此下劑ニハ多量ノ甘汞及蓖麻子油ノ併用最モ可ナリ即チ

甘汞 ○五乃至○六 乳糖○三

右診斷後速ニ頓服セシム

蓖麻子油 一八〇乃至二〇〇

右前方用後少量ノ水上ニ灌キテ半時以内ニ頓服セシム

但シ余ノ療法ニ於テハ下劑ノ反復ヲ要セザルヲ常トスルモ、若シ更ニ應用ノ必要アラバ再與シテ可ナリ、又下劑ハ速ニ奏効シ且ツ其作用ノ確實ナルヲ必要トスルガ故ニ最初期ノ者ニハ單ニ甘汞蒺刺巴未各〇四乃至〇五ヲ與フルモ可ナリ而シテ若シ腹痛ヲ起スルハ下腹部ニ懷爐等ヲ應用セシムベシ、又前方蓖麻子油ヲ服用シ難キ者ニ在テハ大黃浸等他ノ下劑ヲ應用スルモ妨ゲナシ。

然レニ時日已ニ稍經過セル者ニ在テハ惡心嘔吐等不快ノ傍症ヲ續起シテ殆ント内服藥ニ耐ヘザル者往々之アリ、此場合ニ在テハ下劑ニ換フルニ灌腸法ヲ以テシテ次ヲ主藥ノ灌腸法ヲ實行スベシ、然レトモ斯ノ如キ病者ハ已ニ概ネ刺戟痛ノ爲メ次回ノ灌腸ヲモ嫌忌スルハ必然ナリ、故ニ須ラシ古加乙涅、莫兒比涅等ノ麻醉藥ヲ應用シテ後ヲ最モ注意シテ灌腸法ヲ實行セザル可カラズ。

斯ノ如ク併發症狀即チ發熱、惡心嘔吐、食思缺乏等ニ處スルノ方法ハ悉トシテ論述スルノ暇ナキヲ以テ茲ニ省略スベシト雖モ、要スルニ適藥ヲ内服シ難キ者ニハ適藥ノ灌腸法ヲ實行シ若クハ内服ノ奏効著明ナラザル者ニ在テハ該適藥ノ灌腸法ヲ併用スベキナリ。

茲ニ各合併症等ニ對スル種々ノ療法ハ姑ク措テ論セサルモ、彼ノ腹痛甚クシキ者ニハ阿片劑即チ托氏散等ヲ兼用シ、殊ニ食料ニ注意シ、腹部ニハ懷爐、薄蕪布等ヲ持長シテ貼用スルガ如キ總テ必要ノ方法アルモノハ悉トシテ併用スベキコト勿論ナリトス。

今ヤ赤痢頓挫ノ特效アリト認めタル主藥ニ就テ論センニ、余ガ茲ニ特效藥ト定メタルハ前述ノ如ク結晶硝酸銀ニシテ其用量ハ通常一日〇一内外時トシテハ〇一三ヲ九ト爲シ一日五六回乃至七八回ニ分服セシムルニ在リ、即チ其處方ハ

第一方 結晶硝酸銀 〇・三 白陶土 四五 護膜末 一・五
右六十九ト爲シ一丸中硝酸銀〇・〇〇五ヲ含ム、黒瓶ニ貯ヘ與フ、一日六

回乃至七回三九乃至四九ツ、チ服セシム。
 但シ其病症強烈ナリト認ムル者ニハ第一回〇〇二五即チ五九ヲ與ヘ
 大約二時間ヲ隔テ、更ニ同量ヲ投シ、爾後ハ〇〇二四九一日三回若クハ
 五回ノ服用ニ至ラシメシコト往々之アリキ、而シテ該藥ヲ應用スルコト
 凡ソ一日内外ニ於テ赤痢ノ主徴タル真正ノ血便ハ未ダ之ヲ看ルニ至ラズ
 シテ諸症殆ント消滅シ去ルヲ常トスレトモ其服用ハ決シテ一日間ニ止ム
 ベカラズ、即チ患者ノ病況ニ隨ヒ例之ハ前記ノ量ヲ二日乃至三日間連服
 セシメ、或ハ第二日乃至第三日ヨリハ〇一乃至〇〇七若クハ又〇〇五ヲ
 一日間ニ分服セシメテ二三日間持長シ、一日一回又ハ二日一回ノ良性便
 通アルニ至テ止ムベキナリ、設トヒ一兩日間ノ服藥ニ由テ全ク頓挫ノ効
 チ奏シ得タリトスルモ爾後三日内外連服持長スルニ非サレバ一兩日間
 ノ後チ再歸シテ赤痢便ヲ排泄スルニ至ルコトアルベシ。
 此赤痢ノ治療法ハ前述ノ如ク施行スルトキハ能ク全治ノ効ヲ收ムルコ
 ト通常ナレドモ若シ其奏効ノ確著ナラザルトキハ即チ結晶硝酸銀〇〇

六縮水三〇〇溶液ノ灌腸法ヲ兼用シテ一日一二回實行スベシ然レトモ
 實際此灌腸法ノ兼用チ必要トスル場合ハ甚タ稀ナルベシ。
 又二三歳以上ナル幼兒ノ赤痢ニハ始メ先ツ甘汞〇一乃至〇一五乳糖〇
 一チ頓服セシメ次チ左方チ與フベシ即チ
 第二方 結晶銀〇〇一乃至〇〇二 單舎二〇〇又ハ偏里設林二〇〇
 縮水一五〇

右黒瓶ニ納メ、一日六回ニ分服セシム。
 但シ前述セル所ハ余ガ療法ノ通規チ一般ニ舉ゲ示シタルモノナレバ患
 者ノ年齢體質等ニ準リ主藥ノ増減チ要スルコト勿論ナルベシ。
 又一方ニハ前述セル硝酸銀ノ内服量ハ余ガ長年月間ノ經驗ニ由リ殊ニ
 周到縝密ノ注意ヲ以テ測定シタルモノナレバ治療家ガ使用ノ後直チニ
 其奏効著明ナラスト速クシテ隨意ニ該適量ヲ減少シ若シハ治療時間ヲ
 短縮セシメンガ爲メ濫リニ多量ヲ試ミ却チ其目的ヲ誤リ或ハ障害ヲ誘
 起スルガ如キナキ様特ニ注意セラレノチ望ムモノナリ。

又處方學上ニ於テハ硝酸銀ハ必ス蒸餾水ニテ溶液ト爲スノ他爾餘ノ有機性物質ヲ混合セザルナ法則ト爲セリト雖トモ殊ニ藥味ヲ嫌忌スルノ幼兒ニ在テハ其服用ヲ容易ナラシメノガ爲メ余ハ常ニ第二方ノ如ク單合ヲ配伍シテ投與シタリキ然レトモ其奏効上著明ノ障礙アルヲ發見セザリシノミナラズ幼兒ト雖トモ通常好シク之ヲ服用シ且ツ其第二方ハ第一方ニ均シク其有効ナリシヲ認メタルニ由リ余ハ敢テ處方學ニ拘泥セズ此處方ヲ諸君ニ推奨スルモノナリ。

硝酸銀ガ赤痢ニ對シテ前述ノ特效的作用ヲ奏スルハ蓋シ赤痢病毒ガ銀化合物ニ遭フトキハ最モ容易ニ其繁殖ヲ防遏セラル、ノミナラズ遂ニハ全ク其生存力ヲモ亡失スルニ在ルモノナルベシ然ルニ現今硝酸銀ノ藥物界ニ於ケル地位ヲ觀察スルニ之ガ醫藥的應用上殊ニ内用ハ寧口近時ニ至テ其區域ヲ減少セラレ來ルコト諸君ガノートナリケル諸氏ノ藥物學書ニ就テモ知悉セララル、所ナルニ拘ハラズ今日余ガ赤痢ニ對シ殊ニ硝酸銀ノ内用ヲ唱道スル所以ハ赤痢ニ對スル其特效的作用ヲ有スル

ニ在ルコト勿論ナレトモ余ハ又其應用ノ方法最モ容易簡單ニシテ隨處隨時ニ之ヲ汎用スルノ便アルハ現今本邦ニ於ケル赤痢ノ如キ流行病ノ治療法トシテ頗ル適當スルヲ喜ブモノナリ。

但シ銀劑ノ應用上ニ注意ヲ要スルハ之ヲ持長ニテ設トヒ數年間ニ亘リ應用スルコトアルモ決シテ一五〇乃至二〇〇以上ニ至ラシム可カラサルヲコシテ所謂「アルギリア」即チ慢性銀中毒ヲ起スノ恐アレハナリ然レトモ前述ノ如ク赤痢ノ特效藥トシテ用ユルノ際斯ノ如キ大量ノ硝酸銀ヲ連用スルニ至ルコトナキハ自ツカラ明白ナリ。

赤痢ニ對スル硝酸銀ノ奏効ハ前述ノ如ク直チニ病素其物ニ對スル作用ナラント雖トモ尙ホ注目スヘキ要點アリ即チ硝酸銀ハ古來ヨリ今日ニ至ル迄皮膚粘膜等ニ起ル潰瘍ニハ極メテ屢使用セラレ而シテ現今尙ホ其有効ナルヲ證明セラル、ハ吾人ガ日常目擊スル所ナリ然ラバ即チ赤痢ノ特徴トシテ發生セル大腸殊ニ直腸等粘膜ノ赤痢性潰瘍ニモ亦硝酸銀ヲ應用スルノ理由アルハ敢テ余ノ説明ヲ待タザルベシ。

畢竟近世ニ在テ獨逸ノ醫家ガ往々硝酸銀水ノ灌腸法ヲ赤痢ニ處方スル者アルハ是レ即チ赤痢ニ於ケル腸粘膜ノ潰瘍性變化ニ對シテ銀劑ヲ應用シタルモノニ外ナラサルベシ然ラバ則チ前ニモ引用セル如ク彼ノ獨逸諸博士ガ赤痢ニ應用セル硝酸銀ハ主モニ赤痢性潰瘍ニ對シテ處方シタルモノナルベキヲ以テ爰ニ余ガ赤痢特效藥ト爲シテ硝酸銀ヲ推薦セルモノトハ大ニ其應用ノ精神ヲ異ニスルコト明白ナリ依テ聊カ茲ニ一言ニ置クノミ。

終リニ臨ンテ諸君ニ懇請スルハ諸君ニシテ赤痢患者ニ接セラレタルトキハ前述セル如キ余ノ頓挫療法ヲ試用セラレ諸君モ亦果シテ其有効ナルヲ證明セラレタラシムコトハ尙ホ汎ク同業諸君ニモ傳ヘラレ今日日本邦各地ニ猖獗セル赤痢ノ毒焰ヲ撲滅スルニ於テ幾分ノ効益アラフコト誠ニ余ノ熱望シテ措カサル所ナリ加之ナラズ赤痢ノ流行地ニ於ケルカ若クハ一家内ニ同病者アルニ際シ本人自身ハ未ダ意ニ介スヘキノ病症ニアラズトスルモ腹部ニ於テ稍異感鈍痛等ヲ覺ユ若クハ使通ニ異狀アル等

ヲ自認セバ設トヒ其症候ハ甚ダ僅微ナリト雖モ之ヲ等閑ニ看過セス充分發症スルヲ待スニテ前方ノ硝酸銀丸ヲ一回三粒一日三四回宛一兩日間服用シテ赤痢固有ノ症狀ヲ未發ニ抑止スルヲ得ハ是レ亦本病豫防上ノ一大方便ナルヲ疑ナケン故ニ余ガ此豫防的方法モ亦余ガ赤痢新治療法ニ等シシ諸君ノ注目ヲ請ハント欲スル所ナリ。

抑モ赤痢ハ十數年來我日本ニ在テ現時外國ニ其例鮮ナキ連年ノ大流行ヲ來シ今ニ至ル迄更ニ底止スルノ狀ナク爲メニ罹病者ハ二百万以上ニモ達シ横死者ハ數十萬ヲ算シ隨テ國民ノ產業ヲ沮滅シ邦家ノ財貨ヲ糜消シ町村ノ困厄ト一家ノ不幸トヲ釀成スルヲ如何ニ夥大ナルカヲ知ル可カラス今ヤ豫防上ニハ殆ント其途ナク治療上ニハ幾ント其術ヲ得サルガ如ク、釐下ノ市府ヨリ田間ノ村落ニ至ル迄此病毒ノ横行セサル處ナシ現ニ日々千人以上ノ新患者ヲ出タシツ、アリテ尙ホ且ツ今後幾年ヲ期シテ全滅ニ至ルヤナ料リ得ズ往年余ハ肺癆豫防論中赤痢ノ如キ流行病ハ今後衛生上ノ進步ニ由リ人爲ニ以テ之ヲ抑制シ得ベク隨テ遠カラ

ス撲滅ノ期アラント一言セシモノ今ヤ其中ラサリシヲ慨嘆スルモノナ
リ、斯ク外國ニモ例ナキ連年ノ赤痢流行ニ由リ國民ヲシテ非常ノ不幸ニ
逢ハシムルハ吾輩醫家及衛生家ノ怠慢トモ云フヘキモノナレバ治療上
ニ豫防上ニ奮テ其任ヲ盡サレシヲ諸君ニ懇請セントス、茲ニ諸君ガ貴
重ノ時間ヲ割愛シテ愚見ヲ清聴セラレシハ余ノ最モ謹謝スル所ナリ。

赤痢新治療法了

明治三十一年九月十七日印刷
明治三十一年九月二十日發行

定價金二十五錢

講演者兼發行人 醫學士 小林 廣

本郷區金助町七十三番地

筆記者 山縣 直藏

本郷區金助町七十三番地

印刷人 松澤 玳三

麴町區下六番町十七番地

印刷所 麴町區下六番町十七番地 (電話本局 三六九番) 同 勞 舍

發行書林

本郷區湯島切通坂町八番地 (電話本局 一三三〇番)
同區龍岡町卅四番地

南江堂
吐鳳堂

60
64

醫學士小林廣著

治癩新論

再改正全一冊
近刻

醫學士小林廣著

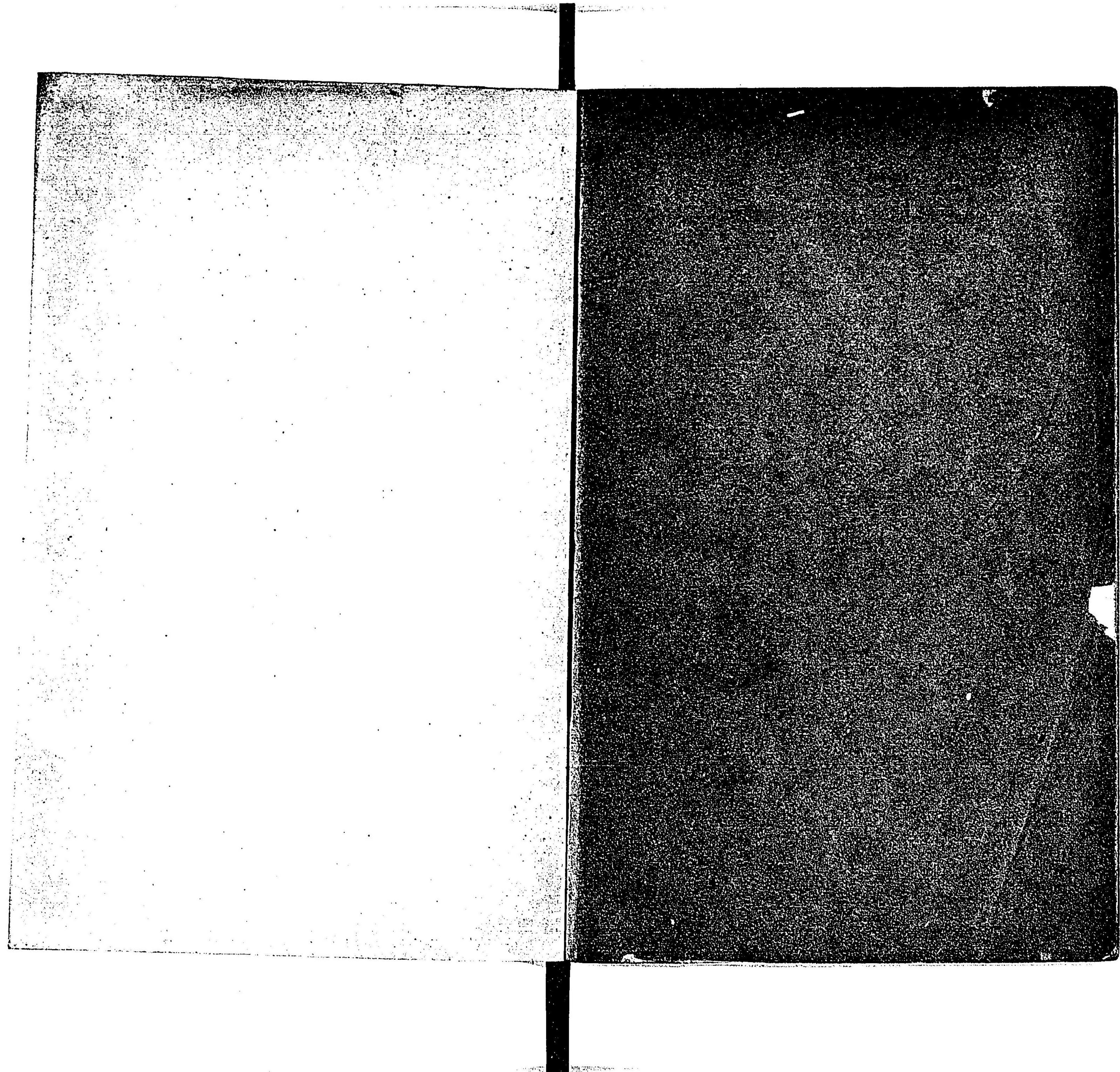
白斑病論

全一冊
近刻

醫學士小林廣著

肺癆豫防論

第一卷
正價金廿五錢



60
別冊
64

